研究プロジェクト「絵画と文学に表象される、時間と空間の脳による認識」
Research Project: Recognition of time and space by brain function as expressed in the arts and literature

実施期間：　2008～2010 年度（3 年間）
Term of the Project: 2008-2010 fiscal years (3 years)

研究代表者：　近藤　寿人　　大阪大学大学院生命機能研究科教授
Project Leader: Dr. Hisato KONDOH, Project Representative on the IIAS Planning Board; Professor, Graduate School of Frontier Biosciences, Osaka University

研究目的：
①背景：
人間とその意識を正しく理解するための学問として、脳機能の研究を発展させるためには、その目標の中に「このような人間の意識の表象が説明されるべき」という課題を具体的に設定することが求められる。絵画や文学には、認識されうるものとしての時間や空間が如実に表象されている。しかし、脳機能の研究と、美術・文学の研究とはこれまで接点に乏しかった。
②必要性：
このプロジェクトでは、脳機能研究、絵画研究、文学研究の専門家たちが、それぞれの立場から「時間と空間の認識」に関する問題を提起し、公開の場で議論を交わすことによって新しい発想をくみ上げる。脳機能の研究に将来的な課題を提示しつつ、美術や文学の演出的な効果のなかに無意識で用いられている「脳機能の特性」を発見するための手がかりを得て、新しい研究の潮流を生み出す。
③方針：
これまでに接点に乏しかった芸術と脳機能の分野の交流はまだ萌芽的である。すでに確立した研究者の発想の拡大をはかるとともに、将来の脳科学を担う大学院生・若手研究者を積極的に議論に参加させて、彼らの脳科学の目標を示す。脳による芸術への表象は、性差の意識や宗教の成立とも密接な関係があるので、これらの分野の研究家をも交えて、本研究プロジェクトを深める。

Objectives:
The mechanisms of brain functions involved in spatial and temporal recognition are the major targets of the cognitive brain sciences. The cognitive functions of brain are explicit in the arts and literature and native forms of religion, which express a human's recognition of space, temporal sequence and self. To draw the attention of brain scientist to this, a forum is organized composed of brain scientists, in particular those among younger generations, and researchers in the liberal arts, namely, literature, history of arts and science of religions. In the history, artistic expression strongly reflected gender recognition and establishment of religions. These aspects will also be included in the subject of the forum.

キーワード：時間と空間の認識、脳機能、美術、文学、ジェンダー、原始宗教
Key Word: Spatio-temporal recognition, brain functions, arts, literature, gender, religions

参加研究者リスト：　10 名（◎研究代表者）

氏　　名	職　　名　　等
◎近藤　寿人	大阪大学大学院生命機能研究科教授
大澤　五住	大阪大学大学院生命機能研究科教授（脳科学）
岡田　温司	京都大学大学院人間・環境学研究科教授（西洋絵画）
小倉　明彦	大阪大学大学院生命機能研究科教授（脳科学）
小倉　孝誠	慶応義塾大学文学部教授（フランス文学）
佐々木　閑	花園大学文学部教授（仏教学）
佐藤　宏道	大阪大学大学院医学系研究科教授（脳科学）
藤田　一郎	大阪大学大学院生命機能研究科教授（脳科学）
山本　登朗	関西大学文学部教授（日本文学）
若杉　準治	京都国立博物館学芸課列品管理室長（日本絵画）

参加研究者が所属する各組織の大学院生を 20 人程度招聘。

研究活動実績：

2008 年度：

脳研究者からは、藤田一郎より「脳と視覚ー見ることの裏側ー」、小倉明彦より「時空間記憶の形成と夢の仮説」を主題として問題提起がなされた。視覚の脳機能が如何に形態や空間の認識に関わるのか、その結果、脳が描く空間が物理的な形態や空間とのずれをどのように生ずるのか、それがどのような芸術的な効果を生みうるのかが議論された。また、脳科学の研究が明らかにする、場所の記憶の成立機構や、記憶の成立への夢の関与が紹介された。美術研究者からは、岡田温司より「ルネサンス絵画の時間と空間」、若杉準治より「絵巻物の時間」を主題として問題提起がなされた。絵画表現における遠近法の成立と、遠近法を逆手にとった絵画表現、異時同図法（帰属文明に依存しない）による時間経過の表現と物語性などが、先の脳機能との対応が議論された。文学研究者からは、小倉孝誠より「歴史叙述・時間・物語」、山本登朗より「物語における時間と空間」を主題として問題提起がなされた。文学から派生した歴史学、「進化」的な歴史観の興隆と反論などが、集団的記憶としての歴史という観点から論じられた。また、「歴史的現在」としての過去と客観的な過去の混在が織りなす文学的な効果などが、丁度千年紀を迎えた源氏物語などを実例として論じられ、文学表現における時間認識について議論された。今後、これらの議論を深化させるとともに、性意識や原始宗教の成立期に関する専門家を研究会の演者に含めて、脳の認識機能の根源に近づくことを目指す。

研究会開催実績：

第 1 回：　2008 年 11 月 1 日　（於：高等研）

参加研究者のほか、22 名の大学教員・大学院生ならびに社会人が参加した。

2009 年度：

近藤寿人よりまず、抽象絵画の成立と、脳の複数の認知機能の並立との関連を例にして、本研究会の趣旨が再度確認された。時間の認識と芸術表現に関して、肥塚隆より、「造形芸術と時間―南アジアの説話浮彫を中心に―」というテーマで、説話の時間経過がどのように壁面に表現されるかの分析がなされ、2008 年度に議論した日本の絵巻物の場合との、時空間に関する表現方法の大きな違いが指摘された。また、岡田温司は、新約と旧約聖書の間のタイポロジー的な関連から、キリストの磔のプロトタイプに関するジェームズ・フレーザーの大胆な説を紹介するとともに、それを看破していたと思われるミケランジェロの作品を解説した。ジェンダーに関しては、小倉明彦が、男女の脳機能の変動とそれを支配する性ホルモンから議論を展開し（「隠れている脳の性差」）、小倉孝誠は、「近代フランスにおけるジ

ェンダーの構図」というタイトルで、19 世紀の文学と絵画において（その作者の男女をとわず）例外なく女性は「見られる」立場であったのが、フローベールの「ボヴァリー婦人」においてはじめて女性が「見る」立場を取ったことを示し、その革新性を指摘した。手島勲矢は、その「ユダヤ教伝統と文字解釈の諸相」において、数字と文字の意味の根本的な相違を豊富な具体例で示し、その認識（つまり対応する脳機能）の分離を鋭く指摘した。また、佐々木閑は、「仏教哲学における時間と空間の認識」について、アビダルマにおける認識論を展開し、特に「刹那滅」という離散した時間の意義を説いた。２年目の研究会では、参加者も異分野融合環境に慣れてきて、相互に突っ込んだ議論が活発に行われ、３年目の研究会への大きな期待につながった。

研究会開催実績：
第１回：　2009 年 12 月 5 日　（於：大阪大学総合学術博物館）
参加研究者および話題提供者のほか、
19 名の大学教員・大学院生ならびに社会人が参加した。

話題提供者：2 名
肥塚　　隆　　大阪大学名誉教授
手島　勲矢　　国際高等研究所企画委員／同志社大学大学院神学研究科教授

2010 年度：
まず近藤寿人が、「美術などの受容には、見るものが受けた教育や伝統の影響が大きく、脳の基本機構と結びつけることができるのか？」という、一つの問に答える形で、「本研究会の企画が、そのような教育や伝統による影響を受けない部分での、脳の認知機能の分析を目指していること」、「２０世紀の芸術の潮流自体が、教育や伝統による影響からの脱皮を志向していたこと」を論じた。ついで４人の講演者が時間をかけて論を展開するとともに、総括的な議論を行った。
若杉準治は、「法然上人絵伝の成立と変容」について論じた。「法然上人絵伝」は歴史的に初めてつくられた高僧絵伝である。宗派の始祖の偉業について、文書による伝達よりもはるかに効果的な視覚による伝達法をとることによって、鎌倉新仏教に力を与え、また広い社会階層に浸透する効果をもたらしたことを、実例と分析によって示した。
手島勲矢は「ユダヤ哲学から『文字』を考える：イブン・エズラの名詞論より」と題して、⑴絵画の記号化によって成立した文字の２面性、⑵個（固）有名詞と普通名詞の相違（主と神など）を中心として、脳（心）による，対比的な認識についての問題提起をした。
小松英彦は、網膜と脳における色覚情報処理の経路についての現代的な知見を紹介したのち、⑴三色性、反対色性、多彩性などが、異なった情報処理に基づいていること、⑵光自体の色と「見える」物の色とは基本的に区別されるものであること、⑶視覚上の色の発展型として、さまざまの色の配置の総合的な情報処理が「質感」を生むことを分析的に解説し、それらの各々についてのこれからの課題を示した。
藤田一郎は、「大きさと深さの知覚を支える脳内機構」について、私たちが日常遭遇するさまざまな、視覚の情報処理に依存した場面と、それに対応する脳活動に関する最先端の実験データを対応させながら解説した。この情報処理機構は、抽象絵画の表現の中にも活用されている。視覚の情報処理の研究の現場で行われている、学術的に厳密な検証作業を強く印象づけた。
芸術が私たちの心をつくる「脳」のかなり直接的な表現であることを確認し、芸術の中の普遍性を持った部分は、脳研究者たちの将来の研究に指針を与えるのではないかという問題提起で、本研究会を閉じた。

研究会開催実績：
第１回：　2010 年 9 月 18 日　（於：高等研）
参加研究者および話題提供者のほか、
11 名の大学教員・大学院生ならびに社会人が参加した。

話題提供者：2 名
小松　英彦　　自然科学研究機構生理学研究所教授
手島　勲矢　　国際高等研究所企画委員／元同志社大学大学院神学研究科教授

Achievement:
2008 fiscal year:
Brain scientists, Ichiro Fujita and Akihiko Ogura, discussed how actual vision, namely recognition of shape and space, is achieved by brain function, and how spatio-temporal memory is established in the brain. Art scientists, Kosei Ogura and Junji Wakasugi discussed how perspective presentation was introduced in paintings, how sequential episodes are arranged in a story-telling picture to indicate the lapse of time, and other various ways of spatio-temporal presentations in paintings. Literature scientists, Kosei Ogura and Tokuro Yamamoto, discussed how the history became recognized as memory held by a group from history-telling literatures, how management of tenses creates strong artistic effects in literatures, and other aspects of temporal matters involved in literatures. Discussions were exchanged between the platform and audience at the meeting held on November 1. The shared concepts that developed in this inter-disciplinary forum will be furthered in the second year's activity.

2009 fiscal year:
After confirmation of the theme of this forum by Hisato Kondoh, three themes were discussed. Concerning the expression of temporal sequences in arts, Takashi Koezuka showed examples of wall carvings in the southeastern Asian areas. Atsushi Okada discussed the prototype event of Jesus Christ's crucifixion to be traced back to a story in the Old Testament, as pointed out by James Frazer, and already drawn by Michelangelo in his paintings. Concerning the gender, Akihiko Ogura discussed the differences in the circadian brain activities between the male and females, which is partly ascribed to the sex hormones. Kosei Ogura described the 18th century's view of females, who were exclusively the subject of observation, and introduced "Madame Bovary" written by Gustave Flaubert which made a revolutionary change in the viewpoint, as Madame Bovary 'observed' the males. Concerning the conceptual issues explicit in the original forms of religions, Izaya Tejima discussed the fundamental differences between the words written by characters and the numerals, as pointed out by Hebrew philosophers. Shizuka Sasaki gave a comprehensive lecture on the world framework of abhidharma, the basis of the classic Buddhism. Active discussions were exchanged among the participants, ending with anticipation for further discussions in the third year.

2010 fiscal year:
The meeting this year started with Hisato Kondoh's talk discussing the almost synchronous beginning of the modern styles in the arts, design, music and literature in the early 20th century. These 20th styles represent a liberation of the sensation of the cognitive functions of the brain from the bondage of tradition and education-based (and stereotyped) interpretation.

Junji Wakasugi delineated how the painting-based representation of the life story of a saint, the first case being that of Honen (Honen Shonin Eden) in Japanese history, rather than story-telling documents, was instrumental in giving authority to new Buddhistic sects of the Kamakura era and

in facilitating penetration of the sects into various social levels from common people to aristocrats.

Izaya Tejima discussed two major themes: the ambivalent nature of a written character derived from a drawing, namely having both a symbolic implication and a mere phonetic meaning; and differing motivations for the distinct uses of proper noun and general nouns even for the same object, such as Lord and God in the testament texts.

Hidehiko Komatsu described how the CNS network involving the retina and various brain domains processes and integrates various information for color recognition, namely trichromatic perception, color contrast and combined color effects. It is not the optical color spectrum but the processed visual data of colors itemized above that the brain recognizes. As their integrated effect, the texture of a surface is recognized by the arrangement of various colors on a miniature scale.

Ichiro Fujita explained the principal mechanisms of visual information processing in the brain to recognize an object size and depth in perspective. Even abstract paintings rely on these mechanisms for their artistic effects. Actual experimental practice was explained, which was the measurement of local neuronal activities that underlie the recognition of the proximo-distal relationship in the brain.

The meeting was closed by confirming that the artistic effects in large extent reflect the characteristics of the cognitive functions of the brain, and proposing that the fundamental elements of artistic expression could be the future target of cognitive brain sciences.

研究活動総括：

研究活動の場としての国際高等研究所の力を十分に活用して「新たな学術の芽」を育てるには、人文科学から自然科学に至るまでの広い視野に立った科学研究の共同活動を展開することが重要である。異分野ともいえる広い分野間で共同活動が、科学者間に新しい共鳴を呼び、新たらしい学術の芽が生まれる。そこで、私の十年来の腹案をもとに、本研究会を企画した。脳研究の将来の対象として、芸術の基盤となる人間の脳（心）の働きを提案するという作業である。私たちの脳の働きを知ることは、私たちの豊かな近未来社会を実現するためには欠かせない。

本研究会では、絵画や文学の表現の中の「時間と空間の認識」、そして原始宗教成立時の、「時間と個の認識」に焦点をあてて、各々の専門家が問題提示と分析をおこなった。研究参加者、そして講師にお招きした方々は、脳科学の実験研究者、文学研究者、絵画研究者、そして古典宗教の創成期テキストの研究者であったが、本研究会の趣旨を汲み取っていただいて、身近な体験の中に隠された深い意味を抉り出し、刺激的な問題提起をしていただいた。そして研究会全体としても強いメッセージを持つことができた。

絵画や文学をはじめとした芸術、そして原始宗教成立時の基本概念には、脳が直接的に認識するさまざまな要素が素材として用いられているだけでなく、それが作品として組み立てられる際には、脳に内在する論理が活用されている。それが、芸術が時代や地理的な隔たりを超えて感動を呼ぶことの基盤である。勿論、芸術の受容には伝統や教育が大きな影響力をもつが、本研究会はそのような伝統や教育による影響からは開放された、脳の認識機能を抉りだすことを目指した。20 世紀の芸術の新しい展開——抽象絵画、新しいデザイン（バウハウス運動）、西洋の伝統の調性や旋法を離れた新しい音楽、不条理文学など——は、いずれも、伝統の束縛から解き放たれた、脳（心）に直結した芸術の要素を抽出する作業であったといえる。また、ルネッサンス、バロックと、新しい表現が次々と出現して人々の共感を呼んだのも、伝統から開放された新鮮な脳の活動の悦びの反映であろう。日本においても、さまざまな斬新さの上に成立した源氏物語、平安期から鎌倉期にかけての仏像彫刻様式の劇的な変容など、そのような例は少なくない。

この研究会が、近未来への問題提起を志すものである以上、研究会の中の閉じたメンバーの議論にとどまっていては、その波及効果に多くを期待することはできない。将来の脳科学を担う大学院生、若手研究者、そして本研究テーマに関心を持つ社会人をも積極的に議論の中に巻きこんだ。許されれば、本研究会で提起された諸問題を整理して、刊行という形で世に示したい。それによって、本研究会から提起する問題が、近未来社会における「現在的な問題」として認知されるであろう。

研究会での議論をまとめるにあたっては、時間と空間と個の認識に関して、次の内容についての議論を報告し、その中から脳（心）の認識に直結する部分を、本研究会からの問題提起としたい。

時間の認識について：

佐々木閑：原始仏教世界における、「刹那滅」という離散時間
山本登朗：平安朝物語における時間の階層と筆者の多様な位置
若杉準治：絵巻物の表現における、時間の階層性
岡田温司：ルネサンス絵画の時間
小倉孝誠：歴史叙述における、時間性の意識の確立
若杉準治：法然上人絵伝の成立と変容
小倉明彦：時空間記憶の形成と夢の仮説

空間、個の認識について：

手島勲矢：文字と数字の異なった起源と対話
手島勲矢：ユダヤ哲学における名詞論
小倉孝誠：近代の文学・絵画が語る、「見られる」女性から「見る」女性への転換
岡田温司：ルネサンス絵画の空間
藤田一郎：脳が描く空間
小松英彦：色と質感を認識する脳と心のはたらき
藤田一郎：大きさと深さの知覚を支える脳内機構

Whole Achievement:

Scientific Forums focusing on the merging of liberal arts and natural sciences will have a unique role in the immediate future in identifying principles of new branches of science being developed to foster human welfare.

The mechanisms of brain functions that are involved in spatial and temporal recognition are the major targets of brain science. The cognitive functions of the brain are explicit in the arts, literature and also in the native forms of religion, which express a human's recognition of recognized space, temporal sequence and self. To draw the attention of brain scientists to these aspects, a forum was organized composed of brain scientists and researchers in the liberal arts (literature, history of arts and science of religions).

The reflection of the cognitive functions of the brain is the most explicit when the arts or religions are in their native form, or when expressed in a new artistic style. In the history of paintings, creation of the Renaissance style, followed by the baroque style are examples, which had no precedent. Another good example is the almost synchronous start of the modern styles of art in the early 20th century (e.g., abstract and cubistic paintings, designs of the Bauhaus movement, music of a non-western mode, and absurd literature). Analogous innovations happened in Japan: the Tale of Genji was a revolutionary new form of literature, and the dramatic shift in the style of Buddhist images as Heian gave way to Kamkura era can also be cited.

The subjects presented all focused on the above theme, and discussions were refreshing and stimulating. A synopsis of arguments and discourse among those present is deserving of publication, in order to widely distribute the ideas presented. The titles of talks will be classified

based on the following disciplines: temporal recognition, spatial recognition, and recognition of self. Commentary notes will also be added.

研究成果報告書の出版：
　2012 年 3 月出版予定

担当：天野副所長

国際高等研究所
研究プロジェクト「絵画と文学に表象される、時間と空間の脳による認識」
2008 年度第 1 回研究会プログラム

開催日時：2008 年 11 月 1 日（土）　11：00～17：30

開催場所：国際高等研究所 216 号室（2F）

研　究　代　表　者：近藤　寿人　国際高等研究所企画委員／大阪大学大学院生命機能研究科教授
担当所長・副所長：岡田　益吉　副所長

出席者：(31 人)

研究代表者	**	近藤　寿人	国際高等研究所企画委員／大阪大学大学院生命機能研究科教授
参加研究者		大澤　五住	大阪大学大学院生命機能研究科教授
（30 人）	**	岡田　温司	京都大学大学院人間・環境学研究科教授
	**	小倉　明彦	大阪大学大学院生命機能研究科教授
	**	小倉　孝誠	慶応大学文学部仏文科教授
		佐藤　宏道	大阪大学大学院医学系研究科教授
	**	藤田　一郎	大阪大学大学院生命機能研究科教授
	**	山本　登朗	関西大学文学部総合人文学科教授
	**	若杉　準治	京都国立博物館学芸課列品管理室長

荒殿　航輔	岩渕　真木子	内川　昌則	小笠原　一紀
岡田　研一	岡本　正博	奥田　雄一	小倉　絵里
北村　　茂	木村　晃大	木村　塁	小関　雅敬
小林　　康	佐々木　耕太	島本　一馬	七五三木　聡
田中　慎吾	土井　隆弘	中島　　実	西村　なおこ
野一色　いずみ	山本　洋子		

**：スピーカー

プログラム

11 月 1 日(土)

11：00　打合せ・昼食〔セミナーラウンジ〕

13：00　研究会〔216 号室〕

はじめに：近藤　寿人

国際高等研究所企画委員／大阪大学大学院生命機能研究科教授

13：05　話題提供者：藤田　一郎　　大阪大学大学院生命機能研究科教授

演題「脳と視覚～見ることの裏側～」

13：45　話題提供者：岡田　温司　　京都大学大学院人間・環境学研究科教授

演題「ルネサンス絵画の時間と空間」

14：30　話題提供者：若杉　準治　　京都国立博物館学芸課列品管理室長

演題「絵巻物の時間」

15：10　休憩

15：25　話題提供者：小倉　孝誠　　慶応大学文学部仏文科教授

演題「歴史叙述・時間・物語」

16：10　話題提供者：山本　登朗　　関西大学文学部総合人文学科教授

演題「物語における時間と空間」

16：50～17：30

話題提供者：小倉　明彦　　大阪大学大学院生命機能研究科教授

演題「時空間記憶の形成と夢の仮説」

配布資料（公開不可）

- 岡田　温志「ルネサンスの時空」
- 小倉　孝誠「歴史叙述・時間・物語」
- 山本　登朗「平安朝物語における時間と空間」

国際高等研究所
研究プロジェクト「絵画と文学に表象される、時間と空間の脳による認識」
2009 年度第 1 回研究会（通算第 2 回）プログラム

開催日時：2009 年 12 月 5 日（土）10：30～17：00

開催場所：大阪大学総合学術博物館 3 階会議室
豊中市待兼山町 1-20

研　究　代　表　者：近藤　寿人　大阪大学大学院生命機能研究科教授
担当所長・副所長：川北　　稔　副所長

出席者：(29 人)

研究代表者		近藤　寿人	大阪大学大学院生命機能研究科教授
参加研究者		大澤　五住	大阪大学大学院生命機能研究科教授
（7 人）	**	岡田　温司	京都大学大学院人間・環境学研究科教授
	**	小倉　明彦	大阪大学大学院生命機能研究科教授
	**	小倉　孝誠	慶応大学文学部仏文科教授
	**	佐々木　閑	花園大学文学部教授
		佐藤　宏道	大阪大学大学院医学系研究科教授
		山本　登朗	関西大学文学部総合人文学科教授

**：スピーカー

話題提供者	肥塚　　隆	大阪大学名誉教授
（ｹﾞｽﾄｽﾋﾟｰｶｰ）	手島　勲矢	同志社大学大学院神学研究科教授
（2 人）		

その他参加者　大学教員・大学院生ならびに社会人
（19 名）

プログラム

12 月 5 日(土)

10：30　はじめに　：近藤　寿人　　大阪大学大学院生命機能研究科教授

10：50　話題提供者：肥塚　　隆　　大阪大学名誉教授
演題「造形芸術と時間」

11：30　話題提供者：小倉　明彦　　大阪大学大学院生命機能研究科教授
演題「隠れている脳の性差」

12：10　昼食

13：00　話題提供者：小倉　孝誠　　慶応大学文学部仏文科教授
演題「近代フランスにおけるジェンダーの認識」

13：40　話題提供者：岡田　温司　　京都大学大学院人間・環境学研究科教授
演題「磔のキリストー人類学者フレイザーの仮説とミケランジェロ」

14：20　話題提供者：手島　勲矢　　同志社大学大学院神学研究科教授
演題「ユダヤ教伝統と文字解釈の諸相」

15：00　休憩：維新派パフォーマンス（博物館前広場）

15：50　話題提供者：佐々木　閑　　花園大学文学部教授
演題「仏教哲学における時間と空間の認識」

16：30～17：00　　討論

国際高等研究所
研究プロジェクト「絵画と文学に表象される、時間と空間の脳による認識」
2010 年度第 1 回研究会（通算第 3 回）プログラム

開催日時：2010 年 9 月 18 日（土）13：00～17：30

開催場所：国際高等研究所セミナー1（1F）

研　究　代　表　者：近藤　寿人　大阪大学大学院生命機能研究科教授
担当所長・副所長：川北　　稔　副所長

出席者：（19 人）

研究代表者		近藤　寿人	大阪大学大学院生命機能研究科教授
参加研究者		大澤　五住	大阪大学大学院生命機能研究科教授
（5 人）		小倉　明彦	大阪大学大学院生命機能研究科教授
		佐藤　宏道	大阪大学大学院医学系研究科教授
	**	藤田　一郎	大阪大学大学院生命機能研究科教授
	**	若杉　準治	国立文化財機構京都国立博物館学芸課列品管理室長

**：スピーカー

話題提供者	小松　英彦	自然科学研究機構生理学研究所教授
（ｹﾞｽﾄｽﾋﾟｰｶｰ）	手島　勲矢	元同志社大学大学院神学研究科教授
（2 人）		

その他参加者　大学教員・大学院生ならびに社会人
（11 名）

プログラム
9 月 18 日(土)
13：00　話題提供者：若杉　準治　　国立文化財機構京都国立博物館学芸課列品管理室長
演題「法然上人絵伝の成立と変容」
14：00　話題提供者：手島　勲矢　　元同志社大学大学院神学研究科教授
演題「ユダヤ哲学から『文学』を考える：イブン・エズラの名詞論より」
15：00　休憩
15：30　話題提供者：小松　英彦　　自然科学研究機構生理学研究所教授
演題「色と質感を認識する脳と心のはたらき」
16：30～17：30
話題提供者：藤田　一郎　　大阪大学大学院生命機能研究科教授
演題「大きさと深さの知覚を支える脳内機構」